東京都江戸東京博物館研究報告　第12号　2006年３月
Journal of Edo-Tokyo Studies, NO.12, P1-23, March, 2006

【総　論】

江戸城と丸の内

小澤　弘*

はじめに

おはようございます。当、江戸東京博物館は、開館しましてから十二年を迎えますが、ミュージアム・セミナーは以前から催しておりました。「江戸東京の歴史と文化」について沢山の当館ファンの方が、一緒に体感しよう、歴史や文化の講座を聴こう、あるいは見学会に行こうと、ご参加いただいています。

実はご多分にもれず、博物館も今大変な時代になりまして、「稼げ」「集客しろ」と、東京都だけではなく、日本全国だけでなく、世界中の博物館・美術館がそういう目に遭っております。

ちょっとお話しが違うのですけれど、つい九月の初めにドイツへ、私としては大変珍しく調査研究をしない旅をして参りました。ただの観光という海外への旅は初めてでありまして。しかし、やはり作品を見たいとの色気がでまして、ベルリン公立図書館で一つだけ絵巻物をお見せ下さればいいなと、ベルリンのある方にちょっと話しましたら、図書館の日本部長さんがどうぞお見せしますよと言うので、念願の十何年来見たかった絵巻を見て参ったのです。そこでも話題となったのですが、ベルリンでは大規模な博物館・美術館の活動をしておりますが、やはり、お金の問題が大変でして。ご承知のように、一九八九年十一月に東西ベルリンの壁が崩れまして、それ以降ちょうど東ベルリン側のあるミュージアム・アイランドというゾーンを中心に、二〇一五年までに先端的な博物館・美術館等を集めたい、建てたいという大事業が進んでいるのですが、そこで資金がないと。それで、いろいろな仕掛けをしておりまして、今、一番恐らく最先端の博物館活動を展開しておりますのがベルリンだと思います。しかし、そういう中でも、そうした館長さんをはじめ博物館の方にお会いしてみますと、「お金が無い」「人が無い」「でも頑張らなければならない」と。当館も事情は同じであります。

「えどはくカルチャー」と江戸博シンポジウムと

この講座を企画・運営しておりますのが都市歴史研究室といいますが、国の博物館にはそういう研究組織はあるのですが、いわゆる県立クラスの博物館にはあまりない組織であります。その研究室を中心に、ミュージアム・セミナーを当館の学芸員や研究員が取り回しているのですが、もう少しやはり学術的なものを皆さんに提供し、博物館活動をよく分かっていただくための仕掛けをしようというこ

*都市歴史研究室長・教授

とを考えました。

今年の秋から、新機軸の「えどはくカルチャー」という名前で、セミナーを新規装い替えを致しました。何かパチンコ店みたいですけど、中身も一新しましょうということで、「講座」というものをはっきり打ち出しました。まあ、いわば大学的な、しかし大学のように堅苦しくなく、誰でも参加できて、博物館のモノ資料を使いながら、皆さんに体感していただくという仕掛けであります。いくつかの「講座」があるのですが、「江戸城と丸の内」と題して、毎週土曜日の朝早い時間にオムニバス講座を仕立てました。

江戸東京博物館は、先ほど述べましたように十二年目になるのですが、初心に戻ろうということで、二年前に「日本橋」という地域を取り上げてシンポジウムを致しました。去年は「四谷塩町」という、今の四谷駅の北側の地域を取りあげたシンポジウムを致しました。今年は、今最もナウい町であるという、まあ「汐留」もそうなんですが、とくに「丸の内」という地域を取り上げました。「丸の内」地域の現在は、新しいその中通りを中心としたカフェテラスとかで話題となっている「オアゾ」というショッピングモールが作られたりしています。つい昨日も「日経ＭＪ」という新聞に「六本木ヒルズを超える」というリード文があって「日本橋VS丸の内」という記事が第一紙面に大きく載っていました。つまり「日本橋」と「丸の内」のホットな地域のホットな戦いですね。

そういった経緯のなかで、地域活性化と観光都市「江戸東京」というものを目指したシンポジウムを開催しようとスタッフに相談しました。これはちょうど、現在の東京都の政策にも合っていましたので。ですから、研究室も「丸の内」をターゲットにしようと、若い米山助教授を中心に企画・運営してやってみようと。しかし、近代の「丸の内」だけを見るのでは江戸東京博物館らしくないからということで、つまり江戸博は「江戸東京の歴史と文化」の発信センターですから。そこで「江戸城と丸の内」というテーマとしました。

シンポジウムに先立って、新装新たな「えどはくカルチャー」で講座「江戸城と丸の内」を組もうということになりまして、私がその前座を務めることになりました。ただ、私は歴史の完全なプロパーではありませんので、テーマ全体を括るお話しを最初にしょうかと思います。実は来週お話される松尾美恵子客員教授が歴史のご専門でありますから、本当のところ松尾先生がこの最初に総括的な御話して頂くのが良いのですが、ちょうど専任大学の公務の関係でそれができないということで、それでは私が全体のお話しをしようということになりました。

そこで、今日は映像資料を見ながら、江戸城から現代の皇居まで、「丸の内」という地域を見ていただくという仕掛けであります。ですから、これから毎週つづく「講座」で取り上げる可能性のある資料が散りばめてあると思いますが、ご容赦いただきます。それでは、映像をご覧頂きながら「江戸城と丸の内」を概観していただきたいと思います。

江戸城

最初に江戸城のお話をさせていただくわけですが、実は私、昨日十月一日は都民の日でしたね、皇居の周りをぐるぐるまわりまして見て参りました。皇居前の東苑や外苑の誠に長閑やかな景色がある一方で、丸の内や有楽町では建設が進行中のビルがあちこちにあります。しかし、これはドイツの方が大規模で、あちこちの都市で今建築ラッシュですが、上海もそうですね。そういう都市を見ますと、やっぱり日本の経済がもう少し活性化しないかなぁと思うんですが。同時に、スクラップ・アンド・ビルドしないで、元の建物を活用していただきたいと思うんですが。

そうした意味で、皇居前の外苑の広場もなんとか活用できませんでしょうか。東の御苑の方もそうですけども。江戸城の本丸御殿を復元して、できれば大名屋敷も一家分建ててですね。そうすると観光都市としての資源の意味が、文化財復元とともに、とてもあると思います。大阪へ行くたびに、復元大阪城が鉄筋コンクリートで造られたと言って、建てられた時には非常に批判されたのですが。これはパリの鉄塔・エッフェル塔と同じ様なものでありまして、百年も経ってみますと、まぁ百年も大阪城は経たないのですが、今はあのように立派に緑青が吹きまして、あの傍の大阪市の歴史博物館の上の階から見ますと、まさに江戸時代に戻った感じがします。

人間というものは、イメージというものをバーチャルに描くことはコンピューターで簡単に出来ますけれど、やはり実際に肉眼で見る、あるいは入ってみる、味わってみる、体験するという事においてですね、歴史的な復元が出来ること、そして体現することが重要であると、そんな思いがいたします。

武蔵野と江戸

さて「江戸」というのは、武蔵野という非常に大きな広がりを持った関東平野の付け根に位置します。かつて歴史では、古代・中世の武蔵野の付け根にあった「江戸」なんていう所は、ぺんぺん草が生えているというイメージで捉えていました。「武蔵野図屏風」のように、まさに太陽でも月でもぬっと出てぬっと入ってしまう、何もない所みたいなイメージがあり、『落穂集』などの記録を根拠にそのように言われていました。もっとも「武蔵野図」は「伊勢物語絵」の一シーンでありますけれども。

しかし、ここ武蔵野には非常に古い時代から人が住んでいて、営々と生活が続けられてきたことが、埋蔵遺跡の発掘だけではなく、最近の研究でも明らかになってきているのです。

道灌の江戸城から家康の江戸城へ

さて歴史上、康正二年（一四五六）に太田道灌（資長）が江戸城を桜田の郷に築いたと言われています。ある詩人の詩歌（蕭庵龍統・村庵霊彦ほか『寄題江戸城静勝軒詩序』）によりますと、大きな屋敷構えで、その前に江戸の湊、松の枝が非常に大きく伸びているというような詩の内容で、これは白髪三千丈ではないのですが、少し大袈裟に謳ったのではないかと思いますけれども。しかし、確

かに風光明媚な、今の日比谷の辺りが入り江になっていたという時代のことであります。

余分なことですが、もし現在の東京の地層を一キロ間隔ぐらいでボーリング調査をすれば、地層から中世がどのようであったとか、古代はどうであったとか、調査した地層から当時の地形図が出来ると思うのですが。何しろ徳川家康以来の大造成工事、埋め立て工事、そして明治・大正・昭和期の埋め立て工事によって、地形が随分様変わりをしてしまっておりますので。

そして、翌年の康正三年（長禄元年）に、江戸城が完成したと言われております。これから五百年経ったことを記念して、昭和三一年（一九五六）に開都五百年記念の「大東京祭」を東京都がやっています。

その太田氏の後に上杉氏が入って、扇ヶ谷上杉氏の居城となり、それがまた小田原の後北条氏に占領され、遠山氏が城代として力を持ちました。そしてご承知のように、小田原北条攻めの後、徳川家康が豊臣秀吉の命令によって関東地域の拠点としてこの「江戸」へ、駿河・三河・遠江の国から移封される。その時に目を付けたのが桜田郷にあった旧江戸城の地、そこへ新しい城郭都市を造ろうと、江戸城を中心に、その前を開鑿し、神田山を突き崩し、堀割を整備し、町人地と武家地を住み分けた、というお話は、ご存知の通りです。

徳川幕府の拠点・江戸城は、御城内の本丸・天守・二の丸・三の丸、そして紅葉山、西の丸、吹上、といった御殿や施設などが造営整備されて行ったのですが、度々の火災に遭いました。吹上には、当初は徳川御三家の屋敷がありましたが、明暦の大火で郭外へと移りました。またこの大火で焼失した天守も、天守台は再構築されたものの、天守そのものは再建されずに明治維新に至りました。

そのように内郭から外郭へと、城郭の中心がどんどん展開をしていったのです。そうして堀割を中心とした、つまりウォーターフロントの都市が出来たということになりましょう。

そして明治維新へと時代は飛びますけれど、江戸城が開城したときには、実はほとんどかつての江戸城の姿は無かったと言われております。文久三年（一八六三）に本丸・二の丸・西の丸御殿が罹災し、その後西の丸が改築されていたような状態であったといいます。そこを仮御殿として明治天皇が明治元年（一八六八）十月にお入りになり、「江戸城」を「東京城」と改め、一度京都へお帰りになったのですけれど、また明治二年三月に東京へ来られたのですが、その後「東京城」は「皇城」となり、それ以降殿舎の修築工事がすすんで、明治二一年（一八八八）に「宮城」と改め、そして戦後となって今の「皇居」ができあがるという経緯になっております。

内郭の変化

この歴史的な流れの中で、とても大きな変化というのは、一つは江戸城の東側のゾーンが大きく様変わりをしたということ、つまり近代化していったということです。その変化を、後で映像を見ていただきます。とくに「大名小路」といわれたエリア、そして「大手前」と呼ばれた大手門の前、これは老中だとか要職の大名屋敷があ

ったところです。「大手前」や、親藩・譜代の大名たちがいた「大名小路」の、武家屋敷がそっくり明治維新後に無くなるわけです。これらの江戸城を取り巻く内郭が官有地になりまして、半分ぐらいが陸軍の土地になります。そこを、ご承知のように明治二三年（一八九〇）に、明治政府が「丸の内」と「神田三崎町」の一〇万余坪の荒地を三菱に払い下げをして、その一部の払い下げ用地をまた売るという、まぁよくある仕掛けですが、そこへ大正三年（一九一四）に東京駅が出来ると。東京駅が出来ることによって旧江戸城前の空間が非常に大きく変わると、こういうように、二段階に変わるわけです。

明治二七（一八九四）に三菱ヶ原に最初のビル（三菱一号館）ができ、これから明治四〇年代にかけて次々と三菱のビル街ができて、「一丁ロンドン」などと称され、それに応じて東京駅が出来たのです。

そしてもう一つ大きかった変化は、明治ではなく、大正でもなくて、昭和に入って戦後、昭和二三年から二九年、そして東京オリンピック開催に向けて外堀を埋めていくということですね。ラジオドラマ「君が名は」で有名な数寄屋橋もそうですし、鍛冶橋もそうですし、私も小さい頃に記憶しておりますのは、東京駅の八重洲口の向こう側を大きな工事をしていた記憶があります。お堀を埋めたり、いろいろな工事だったと思うのです。今思いますと。もうその頃は、ほとんど外堀は埋まっていましたけれど、随分大きな八重洲口の改修工事を私の小学校の時代やってたように記憶しております。

五十年前の皇居・丸の内の映像

このようなお話を具体的な事例で見ていただくのですが、当館に東京都映画協会のフィルムが所蔵されていまして、これがなかなか面白いので、それビデオに編集しました作品のなかから「一〇〇〇万人の話題」シリーズの「江戸から東京」をまず映します。

＊映像ナレーション「武蔵野は月の入るべき山もなし草よりいでて草にこそ入れ」（万葉集東歌）

なかなか昔のフィルムは情感があるのですね。なんと言うことのない原っぱをナレーションで言っているのですけれど。

＊映像ナレーション「出づるにも入るにも同じ武蔵野の尾花を分くる秋の夜の月」「今日もまた萩のうらはを空に見て　つゆ明け暮らす武蔵野の原」「紫のひともと故に武蔵野の　花は見ながら哀れとぞみる」

丁度今の季節ですね、カラーでないところがかえって風情があっていいですね。

＊映像ナレーション「武蔵野といづこを指してわけいらん　ゆくもかえるも果てしなければ」

このフィルムを全部見ていただくと時間ありませんから、ここでは短く編集をさせていただいております。丁度、太田道灌築城記念五百年の年の映像ですから、このフィルム自体が大体五〇年近く経ったフィルムということです。

＊映像ナレーション「西に富士、秩父の連山、北は荒川、東に隅田、南の多摩の三つの流れは前方の海に注ぎ、水陸の便、軍事交通上

最も優れた地性と断じたからである。また、国は武蔵、郡は豊島、千代田・宝田・祝田と縁起の良い三つの村境であったのも、ゆくゆくは繁栄の地となると考えたからであろう。太田道灌の偉大なる計画によって築かれたこのかきあげ土手の江戸城はその後上杉、北条を経て徳川家康の入国によりこの地に幕府を開いてからは、なにしおう天下のお膝元、かの絢爛たる江戸時代をつくり、明治二年天皇のお住まいになり、江戸もまた東京となり今日に至る」

四十六年前の映像だと思います。皇居の場面ですね。

＊映像ナレーション「では、この江戸城と共に繁栄した江戸から東京の姿を訪ねてみよう。今千代田城の内園にこの長い歴史を偲ばせる樹齢六百年と言われる相生松（図1）が、これは築城前から生えており、姿がよいので道灌が石垣を作るにも枝振りを傷つけぬよう手心を加えた後が見られる」「カルガモ、そして松の緑の間に白く点々としております白鷺の大集団。道灌堀はそれ程奥深い」

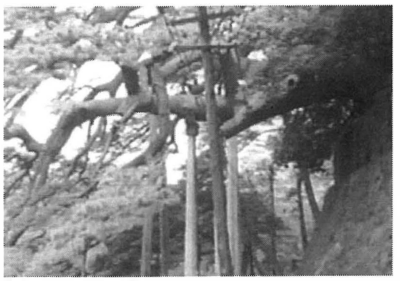

図1　相生松

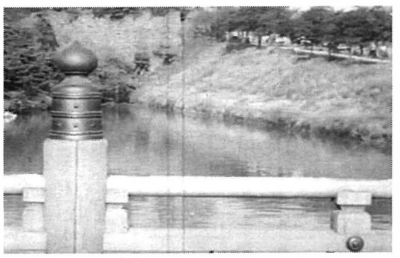

図2　弁慶橋

堀割の今よりも非常に草が茂っておりまして、それをちょっとみていただきたいと思います。この頃もカルガモがいますね。白鷺も。

＊映像ナレーション「三層の櫓で道灌が築いた八方正面の櫓を徳川の時代に修復したものである」「我が庵は松原つづき海近く　富士の高嶺を軒端にぞ見る」「この有名な歌は、道灌がこの櫓の辺りからの眺めを詠んだものであるが、今この櫓から展望すると五百年の時の流れは一面の葦の原野の干潟を林立するビルディングで埋ずめ、簗（ひび）を立てて魚を捕りし猟師町の日比谷は自動車の波が街路を流れ、電気とガソリンの大都会に一変したのである」（中略）「明治初年の牛込門と市ヶ谷門。この辺りから四谷にかけては比較的当時の姿を思い描くことの出来る風景を残している。四谷見附の四谷門。ここは半蔵門から甲州街道に向かう江戸の入口でもあった。ここから眺めると大木戸を経て新宿方面は近年素晴らしい発展を続けている。赤坂御門。しかし弁慶橋から赤坂門跡を四谷方面を望めば都会の中に江戸の情緒を残している堀の景色が美しい（図2）。溜池付近は今日では自動車販売の中心地となっている。当時の赤坂から虎ノ門。寛永十三年に築かれた虎ノ門は、今はその名残も留めない。今虎ノ門のあったといわれる地点から埋め立てられた新橋、そして京橋へと展望してみると全く当時を偲ぶよすがすらない。高架線に沿って高速道路は建設され、

地下鉄は走り、かつて南町奉行所のあった数寄屋橋は蛍の名所といわれた。八重洲河岸から呉服橋にかけては東京駅を中心として大ビル街を現出している。昔の呉服橋。この呉服橋から鎌倉河岸を通って神田橋へこの上流は旧外堀の型を比較的よく残している。常磐(橋)門跡をみよう。堀の石垣を一部残すだけで日本銀行を中心として日本橋の風景は昔の日本橋の繁栄をそのまま受け継いで首都東京の姿を見せているのである」「茫々たる霞の草原が日本の政治の中心地となり、かつての海岸が丸の内日比谷であり、その昔波の上であったところがこういう銀座になろうとは」(中略)「江戸から東京への五百年は日本の政治経済文化の心臓として発展し、今や世界の東京としての弛まぬ建設が進められている」「今壮大なオフィスセンターになっている丸の内(図3)も、昔は三菱ヶ原と呼ばれた荒れ野。大名屋敷の取り壊された跡は子どもの遊び場になっていました。ここに最初にビルを建てたのは三菱の岩崎弥之助という人」「三菱一号館、2号館、3号館とビルが建ち並び、俗に一丁ロンドンといわれるオフィス街になりました。今をときめくサラリーマン階層も此を契機に増えていったのです」

また、別のフィルムのちょっと触りだけ聞いていただきます。

＊映像ナレーション「皇居のお堀端を、石垣を眺めながら散策するのを日課としていたフランスの詩人であり大使でもあったクローデルの詩である。日本の美しさを日本人に教えてくれるのは残念ながらいつも外国人である。世界の首都の中で最も美しい伝統を誇るといわれる皇居。ここは富士山と同様に代表的風景として国民に親しまれ日本全国から集まる観光客が先ず最初に足を運ぶあこがれの観光地。外国からの観光客にとっても大きな魅力をそそる国際的な名所でもある。高村光雲の手になる明治の代表的な美術品。新しい名所となった皇太子ご結婚記念の噴水塔。皇居に向かえば古い歴史を感じ、後ろを向けば新しい時代がある。古いものと新しいものがひとつに溶け合った美しい眺め。しかも晴れてよし、曇ってよし、また降っても美しい皇居の周辺である」

このフィルムはまだ一〇分位ありますので、このぐらいにしておきたいと思います。今見ていただきましたように約五〇年位前の映像と、それ以前の過去の太田道灌以来の時代を編集した東京都映画

図3　50年前の皇居前から丸の内方面の眺望

協会のフィルム。東京都がかつて作ったフィルムであります。当館にはこうした映像記録がたくさんありまして、こういう時に大変役に立ちます。現代よりもう少し前の時代に、どういう感覚で江戸東京の歴史を見ていたか、ということがよくわかるとおもいます。

現代の江戸城周辺

それでは今度は、画像資料で「江戸城と丸の内」について見ていきます。最初に、当館所蔵の「江戸絵図屏風」（口絵1参照）です。これは、江戸城の内郭と外郭がよくわかる資料です。また町人地も見えます。

次が、昨日撮影しました皇居外苑の行幸通りの写真です（図4）。

図4　皇居前行幸通り

皇居から東京駅へストレートに行く通りでありまして、丁度銀杏が少し黄色くなりかけていて、正面に辰野金吾の設計した大正三年に出来ました東京駅があります。その東京駅の手前右手、つまり南側が丸ビル、左手が新丸ビルです。新丸ビルは新しく建て直すそうで今は閉鎖されております。もう一つ左手奥の方に、今話題の「丸の内オアゾOAZO」という、映画館や色々な施設が入ったショッピングモールとホテルと、それからオフィスといろいろ兼ねたインテリジェントビルなどの6つの建物を複合したビル群が建っています（図5）。右手の方には有名な東京中央郵便局があります。

次の写真が「一丁ロンドン」と通称いわれております。三菱ヶ原の跡に三菱地所が建てていく、明治のいわゆるイギリス風のオフィス街という映像です。

図5　丸の内オアゾ

では、皇居周辺の現在の写真を見てみます。ビルがニョキニョキと建っているところは、かつては大名屋敷が広大な敷地を持っていた「大名小路」の辺りです。実は東京駅の南半分は、かつて津山藩松平家の藩邸でありました。江戸東京博物館の復元模型松平伊予守（福井藩）邸もこの辺にあったわけです。

これが東京駅（図6）です。すっかりお化粧直しをして、ここには美術館があります。なかなか素敵な展覧会をやっております。このように外側はなるべく残して、内を改修して美術館として活用するというのは、ヨーロッパの美術館などがやっていますね。日本では江戸時代の建物は、ほとんど焼けてしまして、残っているといえば上野東照宮と浅草寺の随身門ぐらいしか、木造建築はないのです。大変残念に思いますけれど。明治以降の建物はまだまだあるので、是非残して活用してもらいたいと思いますが。帝国ホテルなどは、明治村に移さないで、東京駅のような方法で残して、一部分を高層ホテルにしたらよかったと。せっかくライトさんの素晴らしい設計の建物も原位置に残ったのではないかと思うのですが。

図6　東京駅

この写真（図7）が丸の内ビルディング、通称丸ビルですが、フレームの中に入り切らなくて、それくらい高いビルを二〇〇二年の改築で真ん中に追加して建てたのですね。ショッピングモールを兼ねて、大きなガラス張りのギャラリーに生まれ変わりました。

この写真は（図8）は和田倉門の跡です。そこから撮った写真で、帝劇や東京會舘が見えますけれど、こういうなかに第一生命ビルの素晴らしい大理石の建物、戦後GHQが入った建物ですね、そういう堂々たるビルディングがあったのです。今は皇居側を保存して別

図7　新装の丸ビル

館として、後に高い新館ビルを建てましたが。

先ほどちらっと日劇が映画にありましたが、今はもう無くて、その側に朝日新聞のビルもあって、その朝日新聞も築地へ移転しましたね。今は有楽町マリオンになっていますが。

皇居のお堀は石垣とこんもり茂った緑、ここでほっとするわけですが、五〇年前の映像ですと随分雑草が生えたりして、それから比べると今はとてもきれいに皇居はなっているなあと思います。ただ水草が多くて淀んでいる部分がありまして、流れてないのですね。そのために青藻が発生しているところがあります。

映画のナレーションで先ほど、外国の人や東京に来る人が皆皇居へ行くと言っていましたが、この頃そういうことにはならなくなって。だいたい東京駅にも降りなくなってしまいました。東京都内の小学生たちに聞きますと、東京駅に行ったことのない人が随分多いのですね。皆、自家用車で家から直接出掛けたり、学校からストレートにバスで目的地へ出掛けちゃったりと。それで東京駅から修学旅行というのがなくなってしまって。新幹線も今は品川が始発になる時代ですから、ますます東京駅は忘れ去られて、まして皇居へは行かないということになります。

こういう坂下門の風景も見ないと。この西の丸大手前にあたる皇居外苑は（図9）、本当に平らですね。この奥の方に江戸城の城郭が見えていたわけですけれど、大厦（たいか）が見えていたわけですけれど、しかしほんのわずかしか見えなかったはずであります。

これは巽櫓（たつみやぐら）（図10）です。現在四つの櫓が残っていますが、その一つですね。その先右手が桔梗門、内桜田と呼んでいるところです。これは大手門（図11）です。ちょっと今は貧弱に感じられますけれども、桝形で鍵手に入るのですが。

お堀の柳がなかなかきれいですね。ですから新緑の季節ですと、柳が芽吹いてみごとです。旧江戸城の堀割を、ちょっと散歩する雰囲気で写真を見ていただきたいです。せっかく撮ってきましたので。これは平川門、もともと平川という川を堀割にしたのですが、今の日本橋川と呼んでいるのは、平川を堀割を作って隅田川の方へ流したものです。また平川は、神田山を切り崩して今のお茶の水の辺りを開鑿して隅田川へと通したので、一方で神田川という名前になったのですが。

図8　和田倉堀の眺望

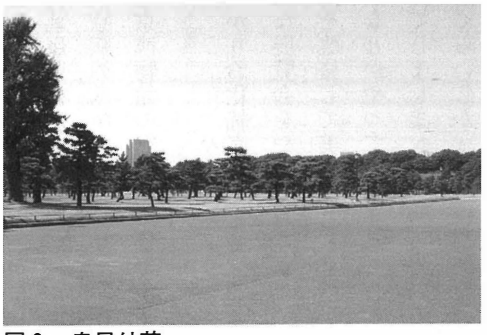

図9　皇居外苑

さて、江戸では火災がたくさんありましたが、焼け跡の上にその度に土盛りする。これは日本だけではなくて他国も同じようなことがあるそうですけれど。どんどん地下へ埋めていってしまうのだそうです。この間ある研究会の報告で聞きましたが、外国でかつての都市を全部埋めてしまい、その上に今の都市があるというので、その地下を巡る、つまり一階分過去の都市が地下なのですね、そこを巡るツアーがあるのだそうです。そこまでは凄くはないのですけれど。

こんなに土盛をしているから、地球は温暖化時代に入ったと言われていますけれども、氷河の氷が溶けてきても、しばらくは東京も大丈夫かなという気はしますけれど。私が小学校の頃は、よく台風っていうと水が出まして、それこそ水道橋の辺りは水が出て、今の後楽園下のマンホールから水が噴き出すのは当たり前でしたが、今はもうそういうことはないですね、余談でありますが。

図10　巽櫓

図11　大手門

大手前・西の丸下・大名小路

さて「大手前」というのは大手門の前のことです。御城地つまり城内の本丸御殿、そして二の丸、三の丸御殿へ行くためのメインゲートが大手門ですが、その大手門へ入るために堀を渡る橋があります。その手前側に位置する地域が、今「大手町」といっている所です。明治維新直後は、「大手町」「永楽町」「銭瓶町」などという町名でした。それが町名改正の中で変わっていったのです。それに対しまして、江戸時代に親藩・譜代の大大名が多く屋敷を構えていた「大名小路」と呼んでいる地域がありまして、後に東京駅もその地域に作られるのですが。それから、「皇居外苑」と呼んでいる地域があります。ここは、現在松の林がありましてだっだ広い所で、今はそこに南北に真ん中を突き抜けて広い道があり車が沢山通過する所もあります。この「外苑」が西の丸下の、つまり西の丸御殿に入る大手門の前であります。この「大手前」「西の丸下」「大名小路」が内郭に相当します。

後で、明治時代に描かれました、江戸城の前の「大手前」と「西の丸下」の屏風絵をお見せしますけど、それはやはり非常に長閑な風景でありまして、そういう所が近代どんどん開発をされていったのです。

かつては江戸城の外堀があったわけですが、その外堀も埋められていくと。つまり八重洲口の方ですね。

もう一度説明しますと、江戸城本丸御殿の跡、二の丸御殿、三の丸御殿がかつてこの辺にあったと言われているのですが、そこに入る大手門、その手前が「大手前」ですね。そして、この大手前が常磐橋だとか呉服橋を経て町人地とつながるのです。「大手前」は、老中格など幕府の重要な人たちの屋敷地があって、当然ながらこの大手前の所へ入城する大名や幕閣の家臣団がこの前へ詰めて待っているわけです。それから西の丸御殿であった所に、今の宮殿が建っているのです。また今の吹上の御所といわれる部分に、かつて徳川御三家の屋敷があって、これが明暦の大火以降に外郭へ出ていくのです。

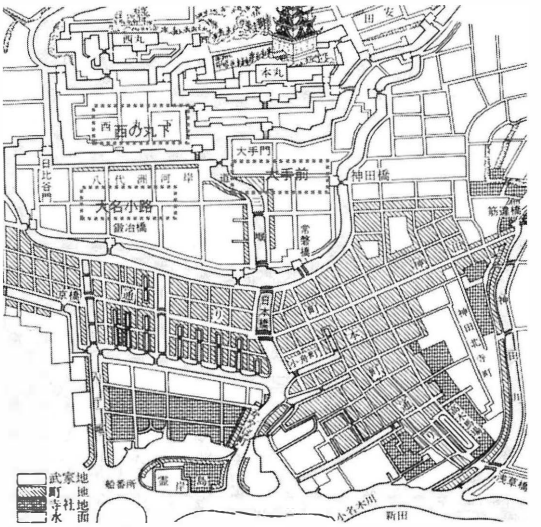

図12　大手前・西の丸下・大名小路

この西の丸御殿の前の所、現在「皇居外苑」と呼んでいる所がかつて「西の丸下」と言われた所です。それから「大名小路」と呼ばれている親藩・譜代の屋敷があった所であります。江戸城の城内は、本丸・二の丸・三の丸・紅葉山・西の丸で、吹上も後に城内に含まれました。そして「大手前」「西の丸下」「大名小路」は内郭でした(図12)。その外側から、見附までの間が外郭に相当しました。

近代の丸の内

さて、現在の「丸の内」の一部と「有楽町」と呼ばれている町名の所が、今これからお話ししていく「近代の丸の内」の地域に相当します。

本来「丸の内」というのは、「丸」つまり武家の砦を意味する言葉から始まって、城の中核という意味でありますした。それがだんだんズレていって、現在の「丸の内」という概念になったのです。今後、話題になっていくのが、皇居外苑をどう活用できるかということ。例えば地下駐車場をつくるとか、いろいろな案が出ていますし、小さな江戸城を作ればというような案もありますし。東御苑は、天守台や本丸跡などがあるところですが、今は日中開園しています。それから近代の丸の内地域では、日比谷公園が作られ現在も都立の公園として遺っています。東御苑、外苑、そして日比谷公園が緑地帯として現在遺っているのが幸せといえば幸せだと思います。

ちょっと時代を溯っていきたいと思います。大正一〇年（一九二一）の「大東京鳥瞰図」では、東京の中における皇居と外堀が遺っています。明治四〇年（一九〇七）の鳥瞰図「大日本東京全景之図」では、宮城とその周囲の堀割に沿って松の並木になっている様子などが見えます。そして、明治初年の日本橋の鳥瞰図ですが、江戸城をやたらと櫓らしきものを多く描いて天守のような感じに見せています。それから享和三年（一八〇三）の江戸城を中心として描いた江戸鳥瞰図「江戸名所之絵」（図13）です。

図13　江戸名所之絵より〈86200902〉

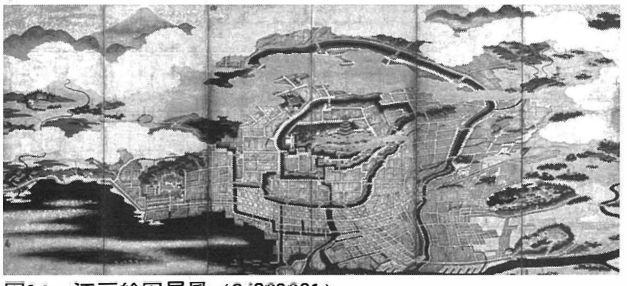

図14　江戸絵図屏風〈84200001〉

そして、皆さんに資料としてお配りした館蔵の「江戸絵図屏風」（図14）ですが、片双が京都を描いたものです。象徴的に江戸市中から富士山が見えるということで、富士山を左手に描いて、そして江戸前の海を描いて、品川辺りから東海道筋を描いています。都市・江戸を表現したほとんどの「江戸図」がこのようです。そして99％が西を上に北を右手に描くという習慣です。といいますのは、江戸城に向かって、大手は東側から入城するという、正式に東側からのルートを、つまり本町通りもそうですけど、これが基本的な江戸の見方であります、また江戸城の前、「江戸前」というのは、江戸湾を見渡す東方、まさに東照大権現ではないですけど、東側から照らされたそういう力を利用して将軍は支配するという考え方。これは藤原氏などもそうでありますね。春日の信仰も、全く同じであります。東方からの神というか、そういう信仰があります。

さて、御府内をめぐる外堀があり、四谷、赤坂、市ヶ谷、浅草橋など、橋と御門があって、これが城郭都市江戸の外郭となります。海の方は無いのですが。高輪辺りとそれから東側の隅田川という所が、いわゆる結界となっております。

昨日、当館にお越しの方は、ホールで竹内誠館長の「江戸っ子と東京っ子」というお話をお聞きになった方もおられると思いますけど。大川という川がひとつの大きな市街地の区分けになっておりますね、それと外堀と神田川が。「のてっ子」と「町っ子」というお話しがありました。江戸城の内郭から外側の東側のゾーンがダウンタウン、つまり下町に相当するという訳です。ですからこの内郭の

部分が、これからお話しする近代に展開してくる部分であります。

この屏風絵を見ていただくと分かりますね。大手前、大名小路、西の丸下という場所が。日本橋、中橋はもうこの図ではありませんが、そして京橋と。大手門の櫓門があります。本丸御殿と、二の丸、三の丸がその脇、西の丸、後に紅葉山があります（口絵1参照）。

この屏風絵は基本が地図ですが、ビジュアルにしたものが「江戸図屏風」（国立歴史民俗博物館所蔵）です。その江戸城の一番向こう側に御三家があります。この御三家を、明暦の大火の後で内郭から外に出して、より将軍の権力を強くしていくということになりました。そのことが江戸が外へ展開していくことにもなるのですが。つまり「大江戸」というような。江戸城の■側には番町といって、将軍家を守るための防備兵が居住した地域があります。そして、本丸御殿の北側には、明暦の大火で焼け落ちてしまった天守がありました。

恐らく本丸御殿を今、木造建築で全部復元すると、これほど広い空間のある木造の建築構造体は無いと思うんですけどね、それだけで大変話題を呼ぶのではないかと思います。この屏風絵の江戸城内部を見てみると、的場とか、弓や鉄砲の訓練場などの内部が詳細に描かれています。それから左側が西の丸御殿、その右手に紅葉山東照宮、ここは丁度三代将軍家光が紅葉山東照宮へ参詣するシーンがあります。この紅葉山に歴代の廟所ができていくのですが。大名小路に松平伊予守の屋敷が描かれていまして、当館の六階常設展示場で復原模型を展示しているがこの屋敷であります。この建物の一棟だけでも、屋敷全体ならばなおさら、原寸で復原すると大名屋敷というものが具体的に、立体的によく分かるのではないか思います。どなたかご寄付をいただければ、まあざっと一千億くらいはかかるのだろうと思うのですけど、外観だけでもですね、土地は別ですが。

さて、江戸へ徳川家康が入ってくる以前の江戸というのは、よく分かってないのが実際です。ですから、この江戸東京博物館のある横網の場所も、本所地域に入るわけですが、具体的にはよく分からない。それでよく挙げられますのが「武州豊島郡江戸庄図」（図15）というものです。これは寛永時代の江戸の地図だと言われていますが、現物が寛永期のものは一枚も遺っていません。江戸の後期に作られたものが何種類か現存します。

この地図で、内郭は御曲輪内の東の部分ということになります。茶色の部分は町人地です。

江戸城の築城の経過を『新編千代田区史』から、さーっと見ていきますと、慶長八年の三月に江戸城下の拡張工事が始まって、慶長九年には石材運搬、慶長一一年から本丸、二の丸御殿の石組が始まりまして、天下総普請で大名たちが分担して普請をしていくのはご承知の通りです。その間に本丸の天守が何故か分からないけれども、三度造り替えられていると言われております。天守の図は当館も持っておりますが。

具体的に言いますと、先ほど江戸城の復原の模型をお見せしましたが、そういうものを当館も造りたいものです。そういうことでしたら、皆さんにご寄付いただけるのかなと思うんですが。ぜひ江戸

城展をやりたいと思うのですが。江戸図屏風では、上下の比率が水平面に対して高すぎますね。平面に対して垂直面が高く強調して描かれている。絵画資料を使って復原をするとだいたい三倍くらい倍率が左右に対して上下が高くなってしまうのです。現実には、高さがそんなにないのですね、水平面に対して。

さて慶安三年（一六五〇）までの築城工事が細かくなされ、この中には石積から始まって、堀浚いから石組、それから本殿の建築や、通路の建築だとか、いろいろな造成工事や建築普請などがあるのですね。ですから大名普請による建築工事がだいたい五〇年近く延々と御曲輪内でやっていたということになりますから、まあ東京オリンピックの四、五年前に相当するような土木建築工事を五〇年ほど繰り返しているという。これはすごいことですね。

東京オリンピックの時は、首都高速道路を通すためだけではなく、様々な仕掛けをしたわけですが。ホテルも造ったりとか。ああいうような状態が、非常に集約して江戸城周辺で行われていたと想像をしていただくとよいかと思います。そしてこれが寛文六年の「江戸大絵図」で、はっきりと江戸城の内郭・外郭の概念が出ています。あまり地図のようなものばかりお見せしてもと思いますが。まあ、はっきりと外堀のライン、内堀のライン、その中を区切っているということが分かっていただけるかと思います。

東京駅は、こうした内郭の「大名小路」と言われたエリアに相当の範囲をとって作られたのです。東京駅の東側が堀割では都合が悪いので、それでまず東京駅の東口の方から堀割を埋めて、その先の数寄屋橋の方も埋めて、外堀をどんどん埋めていってしまうということになったのです。

江戸時代でも実は堀割というものは、埋めたり、開削して堀にしたり、また埋めたりと、その時々の経済やあるいは運輸や様々な理由によって開削してみたり埋めたりと。そんなにお堀も深いものではありませんから、簡単にできるということになります。

さて、甲良家は将軍家お抱えの大工ですが、その江戸城建築指図、つまり図面が東京都中央図書館に遺っておりまして、その一部（図16）をお見せします。

また「江戸天下祭図屏風」という作品がありまして、今は然る所にあるのですが、かつて京都の本圀寺が旧蔵しておりました。この絵は江戸の寛永期頃に、山王祭礼が江戸城の中に入る様子を描いた

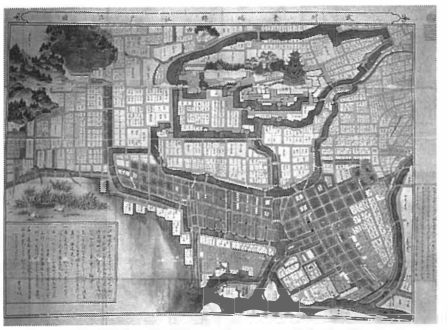

図15　武州豊嶋郡江戸庄図（東京都立中央図書館原蔵）〈89900002〉

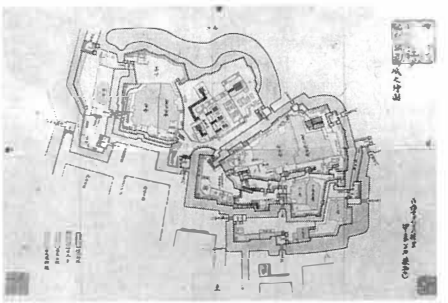

図16　江戸御城之絵図（東京都立中央図書館所蔵）（『城郭・侍屋敷古図集成　江戸城Ⅰ〈城郭〉』至文堂刊より転載）

図でありまして、城内の中の半蔵門から吹上にあった紀伊徳川家の屋敷の縁通って行く、いわゆる吹上の御所の近くから入ってきて、今でいう常盤橋御門の近くから祭礼行列が通り抜けていくのがわかる図です。

この大英図書館所蔵の「諸国海陸安見絵図」（図17）はケンペルの書き込みのある江戸から京都を経て長崎までの道中図の一部で、貞享頃に版本絵図として作られていたものですが、この図においても江戸城というか城郭都市・江戸という概念というのは非常にはっきりしていますね。堀割によって囲まれ、その堀は石垣によって作られ、貞享期当時は江戸城に天守はもう無いのですが、天主に似た櫓や大庇をもった御殿、つまり大屋根をもった建物で、しかももう城の外側には必ず門、つまり櫓をもった門を構えて、そこが江戸という都市へ入ってくるためのゲートになっている、という概念がはっきりと表現されています。とくに神田御門をはじめ、浅草御門とかいうように。

次に、とてもよく売れた江戸を俯瞰した大大判一枚摺り「江戸名所之絵」の江戸城の部分図（図18）です。江戸城は、水平面ではこの図ようには実際は見えないのですが、しかし俯瞰図法でとても高台に表現されていて、櫓とそれから石垣と堀割と御門というものが非常に象徴的に描かれていることが分かります。ズームアップしてみると、毛槍を立てた武家の行列が簡略に描かれていて大名だとか旗本が登城してくるという事を示しています。

次は、厚木市教育委員会の所蔵する「江戸図屏風」で、元々はおそらく細川家の家臣のために作ったものだと思いますが、地図から描き起こしをした江戸図のいい例で、江戸城や大名屋敷などの状況がよく分かります。

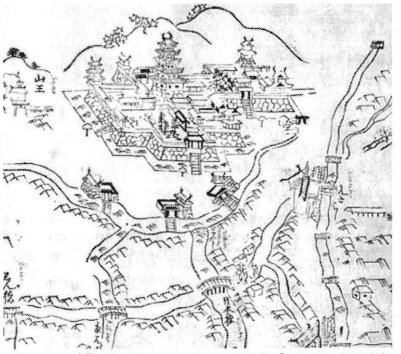

図17　（『ビジアル台東区史』より転載）

図18　〈86200902〉

図19　江戸図屏風より（厚木市教育委員会所蔵）

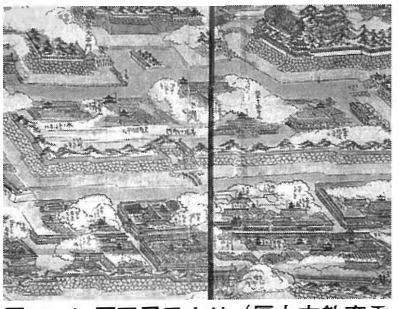

図20　江戸図屏風より（厚木市教育委員会所蔵）

これが大手門ですね、これが二の丸三の丸が恐らくあって、これが本丸御殿、それで平河門は大変有名ですけれども、まあ吉良上野介を浅野内匠頭が刃傷に及んだ時に、犯罪人をこの門から出すと、あるいは大奥の女中たちの出入口として知られているものであります。現在は、比較的頻繁に使われる東御苑へ入って行くゲートであります。そしてその前が「大手前」（図19）ですね。今、ここの所を大きな道路が通っている訳ですね。このちょうどこの辺あたりに毎日新聞社が建っているということです。これが外堀ですね。ここが近代埋め立てられてしまう訳です。東京駅あたりがちょうどこの辺にできてきます。これが「西の丸下」と「大名小路」の辺りの風景（図20）です。

この絵は天保期の江戸の絵図です。巽櫓というのはやはり隅にあったので非常に描きやすかったのでしょうね。ここに描かれています。坂下御門、西の丸へ入っていくための大手門ですね、ここには非常に細かく松平上総守の屋敷だとかですね、松平肥後守の屋敷だとかみんなこう書いてあって特徴立ったものが記録されています。逆に外堀の御門をちょっと見てみると、これが西の丸御殿ですね、極楽橋、四谷御門。さっきもう見るべき姿もないと言いましたが、四谷はまだ少し石垣が遺っていますね。これが赤坂御門ですね。

江戸城年始登城風景図屏風

それではいよいよ館蔵品の「江戸城年始登城風景図屏風」（紙本着色六曲一双）をご紹介したいと思います。この屏風につきまして細かなことは当館の専門研究員の石山秀和さんが、後日このシリーズの講座で丁寧に報告すると思いますので、皆さんにはその概観を見ていただきたいと思います。この絵は佐竹永湖という谷文晁のお弟子さんの又お弟子さんにあたる絵師が描いた屏風絵です。

谷文晁という絵師は、寛政の改革で有名な松平定信の御用絵師であった人であります。谷文晁の作品は日本全国にありまして、偽物も大変多くて、どのくらい作られたのか分からないくらいなのですが。俗に「烏文晁」と言われた作品が多くありまして、文晁の「晁」という字がピョピョって跳ねた字で。そういう谷文晁という大変有名な絵師のお弟子さんの又お弟子さんのなんですが、この絵は明治三一年（一八九八）頃に描いたと言

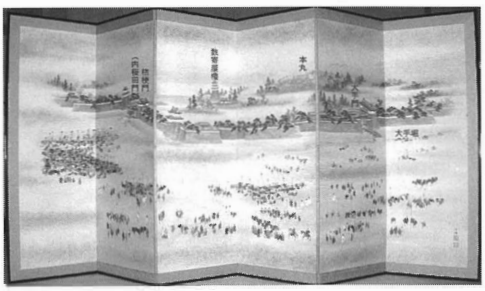

図21 〈90203530〉

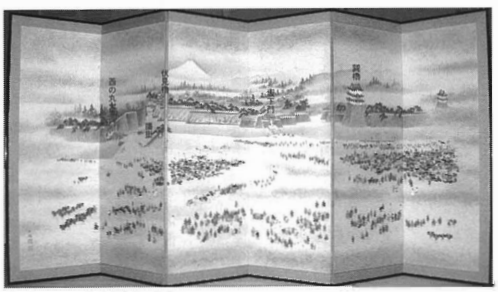

図22 〈90203531〉

江戸城年始登城風景図屏風に描かれた施設名を書きこんだイメージ

われております。この原図と思われますものが、学習院大学の史料館にあるそうです。私もまだ調査をしていないのですが。要するに江戸時代の大名の年始の江戸城登城の風景を、江戸時代の史料やさまざまなデータを使って復元した絵と言ったら良いと思います。そう、お正月の江戸城の年始儀礼という、大変めでたい絵であります。

この屏風絵は金泥引きの絵で、まさに武家の最上の設（しつら）えですね。書院の間などの表座敷の空間は基本的には極彩色ではなくて、水墨に金泥引きの絵というのが武家好みであります。

それで、向かって右の方の屏風を右隻（図21）と言うのですが、それを見ますと、大手堀があって、そして大手門、本丸御殿が奥の方に見えて、恐らく数寄屋橋櫓だと思う櫓が、たぶん細長い高い建物が多分数寄屋橋櫓、それから桔梗門があります。そこに大名が年始に江戸城へ登城するのですが、それを御付の人たちが皆大手門の前、つまり大手前で待ってなければならないのですね、雨でも降ったりしたら大変なのですけど、それでもご主人様を待ってなければいけないのです。殿さまがお城へ入って行って、そして帰って来るまで待ってなければいけない。これは堪らないですね。

皆さんだったら、きっとこの辺に待っているための茶屋でも作って、そこで下城を待っている従者たちを、待っている間に飲み食いさせてとお考えになるでしょう。芝居茶屋だとか相撲茶屋だとかと同じように。しかし、そういう事はできないんですね。それでただひたすら待っているわけですから、とくに正月で寒いですし、腹も減ってくるし、ちょっと一杯飲みたいなとかね。そうした中で、武鑑を売る者がいたりとか、物売りも出てくるわけです。それから見知った中間同士で話しをするとか、隣りの屋敷の大名の家来同士で話しをするとか、そういう風景がこの絵には見られるのです。

左隻（図22）の方は、右隻に連続する画面なのですが、巽櫓があって坂下門、それから伏見櫓というちょっと細長い櫓が、そして西の丸の大手門が見えます。やはり奥に定番の富士山が見えるという景観になっています。

部分をさっと見ていきましょう。これは大手門と松飾りのシーン（図23）、正月ですので橙を飾って注連飾りをして、そして大きな門松があります。それでちょっと細かく見ますと、下馬札がありまして、ここでどんなに偉い人でも馬を降りなさいというわけですね。そうすると。今でいうリムジンカーで来た人は皆そこで黒塗の車を

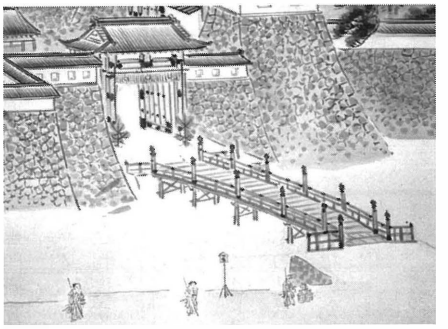

図23

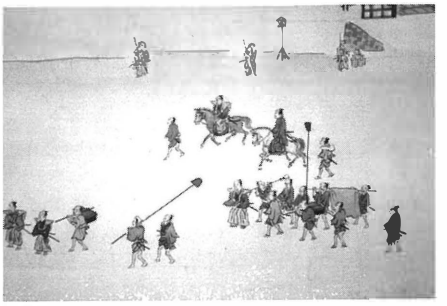

図24

待たしておくという事になる訳です。そうすると運転手さんやお付き人が皆さんここでウロウロしているということになります。ですから駕籠や、馬、そして陸尺や従者たちがこの辺りで待機しているというのです。

この図（図24）のように、ただ供を連れて馬で来る人もいて、またご贈答品を持って歩くんですけども。「熙代勝覧」という絵巻が昨年ベルリンから里帰りをしましたが、あの中にも沢山でてきます。そしてこの人が主人ですね。付き人がこのように付くということです。槍持ちはセットですね。それから番人がここにいます。駕籠で待っている人もいます。それでこういう蛇腹式の籠、折りたたみなんですが非常に便利なものでこれに合羽ですとか、いろんなものをこう折り畳んで入れてあって、それで着ちゃうとバタバタと畳んじゃえるという非常に簡便なまあケイタリングのボックスでありますね。

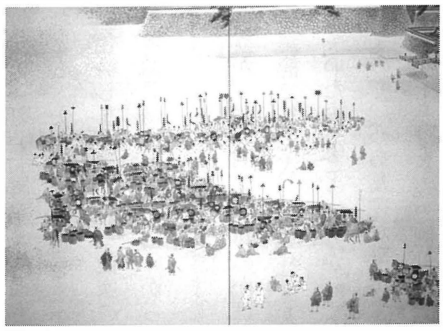

図25

図26

この図（図25）のように、それぞれの家中で毛槍を立てていますから、沢山の大名・家来がここで皆で寒いし、皆でべちゃべちゃしゃべりながら何か食べながら待っているという風景であります。こういう姿あの白い装束ですね。これはまあ公式の、特にこういったあらたまった行事の時は布衣といって五位以下の地下人が本来宮中で着る装束ですが、まあそういうのを着せて衣冠束帯姿で出ていくような大大名になってくると、こういう装束の連中を自分の衣裳に合わせて部下もそういう服装をして出ていくのですね。ですからこうした外見の衣装によって身分も分かってしまうということになります。馬も鬣を飾り立てた立派なものであったり、駕籠も装飾が立派なものであったり、それに家紋がありますから、これに毛槍の形と武鑑などと照らし合わせて調べていくと、どこの大名かが分かるのですけれども。

まあ寝そべったり色々な仕草を皆しております。主人を待つ黒塗車の運転手さんたちの風景と同じですね。欠伸をしている人もいれば、読売や武鑑などを買っていたり。武鑑は毎年出ます。布衣姿の人たちもいます。だんだん挟み箱を持ったりして、また書状箱かなにかを持っている人もいますね。

これは饅頭かなにかよくは分かりませんけど、こうした簡単な食べ物がともかく売れたのでしょうね。それで担いで売っているものは蕎麦だろうと思いますが、詳しいことは石山さんが報告すると思います。

また「江戸に多きものに伊勢屋や稲荷や犬の糞」じゃないですけれども、犬が必ず登場しますね（図26）。それから子供たちも何故か登場します。こんな武家の男たちだけの世界に登場して、こうした年始登場風景が面白いから見に来るのでしょうか。子供がわずか、ほほえましく登場してきまして、これは絵師がわざわざ入れたのかどうか、現実の風景なのかは分かりません。

駕籠で行く人と馬で行く人が、「いやあどうも」といった挨拶をしていたのかどうか分かりませんが、槍の袋の形などで相手が判りますので、ああ友達が来たなあと挨拶をする。それで面白いことに、主人同士と付き人の側近同士が挨拶をしていますが、後の人たちは知らない顔でいますね（図27）。すれ違う間皆挨拶をやっていたら、どこかで転けちゃいますから大変なことになりまけれども。主人と側近だけが挨拶をして、後は知らぬ顔っていうのも変ですが、そういう挨拶の仕方があったのですね。この絵は明治三〇年代に描かれたといいますから、江戸時代の名残をよく調べて描いているのだろうと思いますが、非常に面白いシーンですね。

これが坂下門のの入口です（図28）。ここに小さな橋がこうあってつき出していて小橋になっています。ここも下馬札があります。お供の人たちも寝ちゃったり、もうふてくされてどうでも良いという感じですね。

この大大名の行列はすごい形ですね。この行列が延々と続いていくのです。衣冠束帯姿ですので、相当格の高い大名としか思いようがありません。あるいは御三家かもしれませんけれども。

これ（図29）は煙管の羅宇を直しているのではないかと思うのですが、どうでしょうか。この箱に煙管が入っていますので。羅宇の中に煙草の脂が詰まりますと駄目になる。そこで羅宇竹を取り替える、つまりすげ替えるということをやります。

なにか色々と食べ物だとか飲み物をいろんなものを持ってきてい

図27

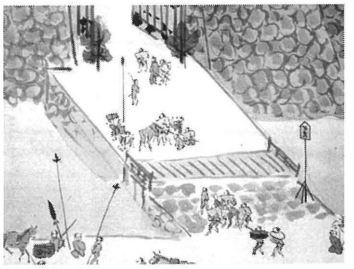
図28

図29

図30

図31

ますね。これは馬に水をやる柄杓を身に付けていますので馬喰です。馬のお尻の正面を見せて描くなんて。中間同士がこれから博打でもやりそうなシーンもあります。渡り中間が、「お前の所の方が給金良さそうだな、そっち行くか」などと喋っているようで、彼らはほとんど着の身着のままの連中ですからね。

なにか商っている娘さんがいますね。武鑑売りが、そして煙草をくゆらした物売りがきています。このように、江戸城年始の登城を待つ従者たちを目当てに、沢山の物売り、食べ物売り（図30）が江戸城の前に出ています。そうした食べ物の、こぼれたものを食べに来るのでしょうか、犬の姿もよく見えます。この立ち売り（図31）は、どうも甘酒売りのようですね。もう一方は、どうもいいお酒のようでありまして。まあ、新年だからいいだろうって理屈をつけたのかどうかは分かりませんが。寒いですから外でこういう風景で。その中を万歳が通ります。本当に万歳師が大手前にいたかどうかは分かりませんが、新年の風景なので絵師が描き込んだのかもしれません。

江戸城は、水平面で見るとこんなにも突出しても見えないくらい、実は城の高さというのはそう無いもので、天守が見えたくらいだろうと思います。

明治期の「丸の内」

安政の大地震の瓦版に「丸の内」という言葉が出ていますので、その部分を点線で囲って示しました（図32）。そこでは、「丸の内」はどうも本丸を中心とした御殿、将軍の居城である地域という意味で使ったのではないかとしか考えようがありませんです。

それから江戸城と言いますと刃傷沙汰のことが話題となります。たとえば桜田門外の変、これは当館所蔵の瓦版（図33）です。また北斎が描いたと伝える江戸城の櫓の図ですが、すごく高すぎるのですよね。その堀端で衛士が焚火をしている。恐らく玄猪の頃の風景だと思いますね。恐らくこれは辰ノ口の辺りだろうと思いますが、半月が出ていまして、なんとなく不気味な絵であります。

もっと珍妙な絵なのですが、明治期に入った頃の、日本・中国・シャムの風景を描いた中の「江戸」の風景なのですが、大手門らしいものにガランとした光景が描かれていて、印象として妙なのですが、まあ江戸城の門構えと大手前などの広場の感じはよく出ているかなと思います。つまりパースペクティブに見た時の、誇張されな

図32　地震方角付（山名新聞歴史資料館所蔵）

図33　〈90204691〉

いような感覚を、つまり等身大の感じといったらいいんでしょうか、そういう意味での江戸城の一光景だろうと思います。

実は明治初年になりまして大名屋敷はそのまましばらく遺っているのですが、明治天皇が江戸へ来て東京という名前が改まって、日本の首都となっていくんですが、どうして京都から江戸を首都にしたのかということについて、いくつかの説があります。明治新政府の首都の候補地は、大坂も候補地で、京都ももちろんそうであったのです。京からそのまま動かなくたっていいじゃないかと。ただ新しい政府を作っていく時に、新し政治の省庁の官舎、軍隊を設置する場所、外国との関係において外国の公館や大使館を設置する場所、それから新しい近代施設、たとえば学校だとか病院だとかそういうものをつくっていくための空間が京や大坂では無いと。それに対して江戸は、大名屋敷や旗本屋敷の土地というのは基本的に幕府が貸している土地ですから、大名や旗本・御家人が全部いなくなれば、その敷地が新しい空間として利用できるという事が、江戸を新政府の首都とした大きな理由の一つだったようであります。

官軍が、江戸城無血開城で早速入ってくるのですが、最初はそう簡単には空地にはならないのですけど。一番先に官有地、それから上級の役人と言いますか新しい明治政府の要人の住まいというか官舎、それから当時は陸軍が中心ですから陸軍の教練地といいますかそれと本部。それからもう一つ、一番重要なことは、天皇の住まいをどういう風に造っていくかという問題がありましたから、一遍には解決していかないのですけれども。

明治一六年（一八八三）に陸軍の陸地測量部が調べて制作した地図があります。この地図では、皇居の所は秘密のゾーンですから、これはかつての江戸城と同じでまっさらになっていますけれど。しかし北の丸御殿がここには示されています。

皇居の周囲は、かなり軍の敷地ですね。法学校などの学校もこの地域に置かれています。それから後に日比谷公園になる場所は、元毛利家などの屋敷地であったのが、陸軍の練兵場となっています。陸軍参謀本部が赤坂田町にありますが、元の溜池の近くだと思います。

このように明治一六年の段階では、官庁と軍の施設、それから岩倉邸のように明治維新政府の要人の屋敷が、旧内郭の地域に建っていくことになります。

こういう問題が明治一六年になる前から、東京をどういう風にしていくかという政府の様々な会議の中で、陸軍を皇居周辺から神田の方へと移ったりいろんな事の方向転換を図っていこうと。つまり、直接皇居の周りを最初守る意味があって軍隊を置いた訳ですが、だんだん外国の手前とかいろんな政府の省庁を建てていくとかいろんな都合上そういう近くにあっては困るという事で、これを先ほど出てきましたように三菱の岩崎へ売ることになるのです。いわば官有地を払い下げですね。これは、官軍に貸した金のかたにつまり、軍資金のかたを安田にしろ、三井にしろ、三菱にしろ、五代にしろ、取っていくわけですから。そういう形で安く払い下げをして、それでそこへすぐには建物を建てられないので、更地になった陸軍の跡地が三菱ヶ原と呼ばれて、まあ桑畑でもやるか茶畑でもやるかなと

俗に言われる原っぱの時代が少しあって、そこへ東京駅ができる計画、つまり鉄道計画が出来て。

それがとても不思議なことですけど、世界の主要都市でコアになる所に直接ステーションと言いますかね、「ハフトバンホフ」とドイツ語で言う、いわゆる「中央駅」ができるという例はほとんど無いですね。京都でも八条口、あるいは北の鞍馬へ入っていく所、あるいは三条蹴上、あるいは二条という風にですね、中心部から御所から非常に離れた所に中央駅が最初造られました。これはパリでも北駅や東駅。これはドイツのベルリンでも動物園駅と東駅があって、今その中間に造っていますけど。ロンドンでもパディントンだとか幾つかのステーションが分散してありますが、真ん中のコアに直接にでは決してないんです。しかし、明治政府の東京では、大変珍しいことに皇居のど真ん前にこの中央駅「東京駅」を造ったのです。しかも後で両国駅をはじめとして、ターミナルステーションを環状線で繋げてしまのうのです。こういう国はあまりありませんね。皇居の前に中央駅を造ったことは、非常に思い切った政策だろうと思います。

それで結局、旧陸軍の跡地を三菱は再開発して、明治の末年にビルをどんどん建てていって、その延長上に現在の丸の内のビル街ができてきたのです。

それでビルだけじゃなんだという事で、今はショッピングあるいは娯楽、アートということを言って、観光都市の目玉にしようということが丸の内地域の大きな開発計画になっているのです。

そして最後に、丸の内オアゾ周辺で大手町・丸の内・有楽町再開発計画の中心の一つとしてこのオアゾというものができたんだそうですが、私昨日は近くまで行っていて、中は見て来なかったんですけど。丸の内のホテルやいろんな施設が一緒になって、元国鉄のビルがあった所ですね、私の記憶では。丸ビルが新しくなって新丸ビルを今度新しくするという。この真ん中の中通りを、再開発しようという計画があるそうです。

観光都市・東京というのを目指す東京都としましては、もう一回地域開発の見直しという事の中に、「丸の内」も「汐留」も「浅草」も「上野」も、そしてこの「両国」の地域もですね、まさにある訳です。この後、毎週のように「江戸城と丸の内」の講座が続きます。沢山の方が通し券を買っていただきまして、本当に御礼を申し上げます。江戸博を今後も宜しくお願いいたします、と同時に企画展も常設展もそれから図書室も様々な施設利用ができますので、どうぞお訪ねくださって、また来週お目にかかれることを楽しみにしております。ではどうもありがとうございました。

（本稿は、シンポジウム「江戸城と丸の内」に先立って行われた、平成一六年一〇月二日のえどはくカルチャー「江戸城と丸の内」講座記録を補訂したものである）